
プラチナめいる

アルストマイア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラチナめいる

【Nコード】

N7827R

【作者名】

アルストマイア

【あらすじ】

目を覚ますと、知らない天井、横の椅子には美少女、自分の体には鎧と激痛？

まあ、初めて作る作品なので、ぐだぐだだとは思いますが、読んだ感想をいただけるとうれしいです！

僕と彼女と機械の鎧（彼女ってそういう意味じゃあないですよ。）（前書き）

基本的に後先考えず書いているので、ここからどうなるかはわかりませんが、読んでいただけるとうれしいです！コメントいただける
と光栄です！
ではー。

僕と彼女と機械の鎧（彼女ってそういう意味じゃあないですよ。）

……い、……さい、……きて下さい！！

どこからか声が聞こえてくる。うるさいな、眠いんだって。もう少し寝てたっていいじゃないか。

……救急車のサイレンの音もきこえてくる。ついでに体がすごく痛い。……っこれってまさか……

僕の意識はそこで闇に落ちていった。

目を開けると、そこには知らない天井があつた。横には、ピツ、ピツと規則的なリズムを刻んでいる機械。薄暗い部屋。ついでに僕はベッドの上に寝ている。

なにが起こったんだ！？気がついたら知らない天井ってベタ過ぎだし！

俗に言うファンタジーでよくある展開だし！俺は改造されてしまったのか？！仮面ライダーか！！バッタはいやだあああ！夢か？もしそうなら夢であってくれ！！

……混乱し思考がぶっ飛んでいたが、とりあえず体を起こしてみる。
その瞬間、

「ぐあつ！」

体中に激痛が走る。ヤバい、意識が飛びそうだ…

「よかった！意識が戻ったんだね……ってまだ動いちゃだめだよ！」
体を押し戻される。同時に痛みが引いた。…誰！さっきの人。聞いたことのない声だったけど…

顔を横に向けてみる。そこにいたのは、

歳は僕と同じ歳くらいで長い黒髪に猫耳、パツチリとした目、背は、
……座ってるから分かんないや。あと、細かい所は暗くて見えな
い。

かなりの美少女だ。

って猫耳っていうのはどーいうこと？

… なにこの状況。

やっぱり夢かな？でも夢なら痛みは感じないはずだし……ってか誰
？この人？

この状況で一番気になることを聞いてみる。

「あの、その、ね、猫耳っていうんですかね？なぜ猫耳をしている
んですか？」

……聞くところはそこじゃないだろ！もっと、ここはどこ？とか、
あなたは誰？とか、なにが起きたの？とかあるだろ！？

……自分でツツコミを入れてみた。

「あ、着けっぱなしだったんですね。教えてくださってありがとうございます
ございます。私、猫耳カフェでバイトしてまして、外すの忘れてた
んですね。」

天然だー！可愛いのに天然だー！かわいいのと天然は最強コンボ
だああ！

「猫耳外すの忘れるくらい急いでたんですね。」

何だー、天然じゃなかったのか……残念……じゃなくて、

「あのー、何を急いでいたんですか？」

「……………」

何だろう、いきなり静かになっちゃって。

「本当に覚えてないんですか？」

「何かあつたんですか？体が痛いのと何か関係が、」

「君は、新幹線にひかれたんですよ！それで私が運んだんです。」

ふーん、そうなの…ってなにいいい！

「新幹線って時速300kmも出る乗り物だよー！おかしいでしょ！」

すると、女の子がパソコンを取り出し僕の方に画面を向ける。

防犯カメラの映像だろうか…

そこに映し出された映像をみて僕は吐いてしまった。言い表すことができないくらい僕の体はヤバいことになっていた。

強いていうなら、
飛び散っていた。

映像をみてショックを受けたのだが、同時に僕の頭の中には二つの疑問が浮かび上がっていた。

よくこんな状態のぼくを運べたなあ…というのと、

「こんなけがをして、なぜ僕は生きているんですか？」

「……………」

また静かになっちゃった。

「分からないんですかあ？よく自分の体をみてみてくださいよ。」

そう言われて布団をどかし自分の体をみてる。

「な、な、なんじゃこりゃあああ！」

思わず叫んでいた。病院の集中治療室で。

…手や足、胴体の一部に鎧がつけてある。

「何ですか、これは。」びっくりして聞いてみる。

「んー、君の体はバラバラになつてて、ほとんど使い物にならなか

つたらしいから。試作段階ではあったけど、うちが開発している機械をつけさせてもらったわ。」

「へえー、すごいですね。これは。指が自由に動く!」

形としては鋼の錬金術師のオートメールといった感じだ。

「まあ、ちょうどよかったのよね。」

性能を検査するために、研究者の体を切って実験するわけにもいかなかったし、どーやって実験データをとりうかつときに、こう、手足が取れてて、胴体の破損も大きく、勝手に治療するのに許可がもらえない人が出てきたっていうのは。」

さっきの映像を思い出して吐きそうになる。

しかし、この人は何者なんだ？

「あの、あなたは、」

「私の名前は白金^{しろがね}。白金メール。」

めいるさんかー。どんな漢字なんだろう。

「金に山に豆で鎧。鎧と書いてメールと読むのよ。」

それただ単に当て字だあーっ!!

「私は漢字で書くのは嫌だから、名前はいつもカタカナで書くんだけどね。」心中お察します。で、

「あなたは何者なんですか？」

「私はある会社の社長の」

娘さんなのかな？

「数いる愛人の中の一人」

……まままマジで!!

「と社長のあいだに生まれた子供よ。」

なんだびっくりした。いや今もびっくりしてますけどね。

社長の愛人ってオチだったら、多分舌を噛み切ってた気がする。そんな事をするはずはないのに。何でだろ…

「じゃあ、君の名前はなんていうの？」

「僕の名前は…えっと、」

何故だか名前が出てこない。自分の名前が出てこないってやばいよね…

「記憶喪失でもしたのかな？」

そう言われてみればさっきから、身内のこととか、今までの事を思いだそうとしているのに、その記憶が全く出てこない。

記憶喪失って…

「これまたベタなことになってるし！」

「いやいや、ベタなものにも、体にあんな衝撃が加わったのに脳が影響を受けてない訳がないよね。うん、納得だね！」

勝手に納得されても困るんだけど、なあ。

「まあ、今日は疲れただろうし、ゆっくりやすんでよ。明日から検査とかあるし。」

んーと、

「何の検査？」

「秘密！じゃあ、また明日」

明日が怖くて寝れないよ……

でも、案外すつきり寝れていた。

僕と彼女と機械の鎧（彼女ってそういう意味じゃないですよ。）（後書き）

2ページ書くのは大変ですね…

僕と彼女と機械の鎧 第2話（前書き）

どうも、アルストマイアです。

感想を頂けると幸いです。

僕と彼女と機械の鎧 第2話

朝7時、すっきり起きることができた僕、その目の前には知らない天井があつた。

パニック状態に陥るすんでのところで、昨日のことを思い出す。昨日は薄暗くてよく見えなかった手足の機械を観察する。

……配線が丸見えだ!?

急遽取り付けたとは言え、ちよつと物が当たっただけでエナメル線が切れて、腕が動かなくなりそうだ。大切に扱わないとな。

まあ、でも腕に少し鉄板がついているのがせめてもの救いかな。

って、今気づいたけど、超、体が血生臭い。風呂はいってゆっくりしたいな、

そこで昨日の鎧少女登場。今日は学校の制服と思しき服を着ている。昨日は暗くてよく見えなかったけど、やっぱり綺麗だなー…じゃなくて、

「おはよー…鎧少女さん。」

すると、笑顔で、

「おはよう!……メールって呼んでね……」
なぜかしよぼんとしている。

「そういえば、体が血生臭いから洗いたいんだけど、」

「自分のいまの体をよく見て考えなさい。」

そう言えばいまのからだは、外部衝撃にはかろうじて耐えられるけど、水に漬けたら、ショート確実な感じの体だったんだ。血なまぐさを消すことはできないのか…

「代わりにこれとこれ、あげるよ。これで頑張って!」

そう言われて渡されたのは、
ファブリーズ

と

女物の香水

（作者は香水についての知識がないので香水に男女用のものがあるのか知らないのでご了承を）

おいおい、これでどうしろと…

まあだいたい考えは分かるけど、血の臭いがこんなので消えるのか…
全身に振りかけてみる。するとどうだろう。ファブリーズと香水
と血の臭いが混じり合って…

無臭になった。

（作者の空想です！真似しないでね！）

「やった！ちのにおいがきえた！！」

すると、喜んでいる僕にメールが、驚愕の発表をした。

「じゃあ、リハビリとデータ採集と気晴らしを込めて学校にいこ！」

え…ええええええ！

この鎧でー！どこのー！

「鎧については光学迷彩を仕込んであげるから大丈夫。でも、あんまり大きく動かないでね。光学迷彩が解けるから。」
つて…

「どのくらい動いたら光学迷彩が解けるのー？」

「んー、百メートルを五秒ではしるくらい。」

うん、大丈夫だな。

「どこの学校に行くんですか？」

「君が通っていたと思われる学校。事故現場から一番近い所をチョイスしてみたのー。そこにいけば君の名前くらい教えて貰えるかも
と思つて。」

まあ、そう考えるのが妥当だね…

「じゃあ、準備して行こうよ！」

面倒だけど楽しみだなー！

（数時間後）

「では、転校生を紹介します！出てきてください。」

先生の呼びがかかり、メールが先陣をきつて扉をあける。その一瞬でクラス全体が息を呑み、おー、といった声を出す。さあ、次は僕の番だ。勇気を振り絞り、中にはいる。その瞬間、
「……ライト！？」「」

ちなみに、事故っても僕の顔には損傷がほとんどみられなかったそうだ。

とにかく、僕の名前はライトらしい。

みんながざわついていたが、メールが自己紹介しようとすると、みんな静かになる。

「皆さんはじめまして、しろがねめいるです！これからよろしくお願いします！」

メールが自己紹介しながら、黒板に名前を書いていく。

書き終わったようなので黒板を見てみた。そこには、白金鎧と書いて……なかった。

やっぱりメールってカタカナで書いてある！それをみたクラスのみんなは絶対勘違いするぞ！

……案の定みんなは鳩が豆機関銃を食らったような顔をしていた。

絶対ハーフだと思ってるな！

…まあいいや、次は僕の自己紹介だ。

「みなさん初めまして。自己紹介なのですが…僕、ある事故で思い出の記憶を失ってしまって…誰か僕の名前を覚えてくれませんか？みなさんは僕の名前を知っているようなので。」

そういった瞬間、クラスのみんなが鳩が豆ライフル食らったような顔をして固まった。

しばしの沈黙が訪れ、やがてひとりの女子が口を開いた。

「かいなか、らいと。あなたの名前はかいなからいとだよ！」

かいなからいと？かいなか？貝中？？中身？んんん？二枚貝は好きだけど、巻貝は苦手…

じゃなくて、貝中かあゝ、名前がライトだからもっと、ごつい名字が来ると思ったのに、

「懐中電灯って書いて、かいなからいとだよ！」

！！！！！！！！！！　　な、な、何だってえええ！！

貝の中じゃなくて、懐の中？

当て字じゃねーかつ！！

…隣で笑い声がする。みてみると、メールが口を押さえて笑って…

「…かいなか、懐中電灯って…ぷっ、くくっ、あはははっ！！！！！！！！！！」

いや、耐えられなくて爆笑している。

失礼なゝゝ！人の名前を聞いて笑うなんて！……まあ、いいか。

「じゃあ、空いてる所に適当に座ってくれ。」

「後ろの2つ空いてる所。あそこに座ろっか、ライト。」

「ああ、そうだね。」

席に座ろうとして、ふと気づく。

この学級、空き席が多すぎる。何か大きな事故でもあったのかな？

…気にし過ぎか…

あーあ、緊張したら疲れちゃったな、居眠り我慢できるだろうか…

僕と彼女と機械の鎧

第2話（後書き）

作者はかなり無知ですが、どうぞヨルシクおぬがいたします！

僕と彼女と過去の巫女

はあ、疲れた。

みんな僕のことは知っていたけど、転入生のメールと同じ扱いを受けた。

要するに、質問責め。転入の際の定番中の定番だ。

まさか、こんなに大変なことだったとは…

時は移ろぎ、昼休み。

僕とメールで、取り巻きの割合が、最初は4対7だったのが、1対9になった。まあ、メールは美少女だからね…

メールの机の周りには、男女問わず人が集まっていた。人数ざつと5〜60人つてとこかな。

あれ？あれ？確かクラスメートは29人。

人、多くないかい？

廊下の方を見ると、人が続々と集まってきた。何かを話しているようなので、耳をかたむけてみる。

「あれが噂の転入生かな？」

「噂に聞いたとおり可愛いな！」

「百聞は一見にしかず。具体例だなー（笑）」

「ファンクラブができるのも時間のも……」

これ、他のクラスの奴らも来てる。

……よっぽどヒマなんだな。

ところで、今、僕は……

追い詰められている。

…何のことかって？それは僕が聞きたい。

いま、メールの周りには、50人弱の男女生徒。

そして、僕の目の前には…

女子が3人、そのうちの1人は朝、僕が名前を聞いたときに教えてくれた女子だ。名前は確か…

霧宮 朝霞^{あさか}、だったか。

自己紹介の時、何故か神社のすがすがしい朝を想像してしまったのを覚えている。

それにしても、この人、特に気に留めて見てなかったんだけど…可愛い系の美少女だ！モデルにも引けをとらないんじゃないかな？って思うくらい…

目があった。しばらく見つめ合う。ってヤバい！にやけるとこだった…

…それはそれとして、後の二人は…誰？

同じクラスにこんな人居たっけ？霧宮と仲が良さそうだけど…

って、今はこの危機的状況の打開策を打ち出さねば。

危機的状況といったが危ないわけじゃない、知らない（覚えてない）女子に囲まれて、さらに疑いの目でジロジロ見られるのは苦手、というだけだ。

「あのー、何でしょう？僕の顔に何か付いてますか？」 冗談混じりに聞いてみる。

「何も付いてないよ。それより本当に覚えてないの？」

覚えてない？ああ、記憶の事か。

「うん。なんにも覚えてな…」

「本当に？本当に本当に本当に？…この人を見て！じっくりと！」

右側のポニーテールの女子（この者を仮にポニーと呼ぶ。心の中で）が、霧宮の肩を揺すりながら僕に問いかける。

…霧宮…霧宮、

急に強烈な頭痛が僕を襲い、僕はその場にうずくまってしまう。

…頭の中に見たことのない映像が流れ込んでくる。これは…記憶なのか？

晴れた朝の神社で二人並んで歩く男女。ひとりは…霧宮か？もうひとりは…顔がぼやけててよく見えない。身長は僕と同じくらい。というかほぼ同じ。……これってまさかっ…！

…と思ったけど、この記憶は三人称視点なので、僕以外…ってことか。

仲良く話しながら歩く二人を見ながら、

…僕はストーカーだったのか…

そう考えて少しへこむ。でもなんで僕はこの人たちを追いかけているんだろう。ストーカーする理由、ストーカーする理由…

好きだから？

……え？

「…丈夫？大丈夫？」

誰かの声が聞こえる。白昼夢は終わっていたようだ。いつの間にかやら頭痛はおさまっていたので、立ち上がり、目を開けてみる。

「なんだこの大きな顔！って顔が近くふっ！」

胴体に威力を抑えたボディーブロー、いや、ハートブレイクが入る。

「そんな事は思っても言わないでよ…」

威力は抑えてあったが、急所は外さなかったな…

「霧宮の顔は大きくないよ…あと殴ってもいい…ことはないけど、せめて急所は外してくれ…」

霧宮は一瞬はっ、としたような顔をして、

「ごめん！大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ…失礼なこと言ってごめんな。」

少し間が空く。なぜかって？それは……

霧宮がどこことなく寂しそうにしていたから…

それと、あの白昼夢（記憶？）を思い出したから……

あれが記憶であろうと夢であろうと、変わらない事がある。

夢は自分の無意識を映し出す。

記憶なら紛れもない事実。

…要するに、僕は霧宮の事が好き、だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7827r/>

プラチナめいる

2011年10月8日22時04分発行